

# シニア・ボーダーのケア

頭が良く活発なボーダー・コリーにも、老いは確実にやってくるもの。  
若いうちからの心がまえとシニア犬ならではの付き合い方を学んで、  
穏やかで豊かなシニアライフをともに満喫しましょう。

文\*岩崎雅和先生  
(獣医師/岩崎動物病院)  
イラスト\*中島慶子



## はじめに

人間に比べて寿命の短いワンコたち。まだまだ若いと思っても、老化は確実に始まっています。ボーダーの国内最高寿命は18歳で、平均寿命は10〜15歳といわれ、シニア犬の仲間入りは8歳ごろからと考えられています。

## 徐々に現れる老い

5歳を過ぎたころから初老（人間でいう40歳前後）の時期を迎え、黒い被毛に白髪が目

立つ子が増えてきます。獣医療の現場で老齢性疾患が認められるようになるのは7歳くらいからです。また、飼い主さんが気がつきやすい外見の変化や運動機能の低下がはっきりと認められるのはさらに遅く、おそらく10歳を超えてからです。耳が遠くなり、白内障や遺伝病などで視力が低下し始めるころには、より白髪が目立つようになり、つやもなくなつてきます。体をさわるとお尻や四肢の筋肉の張りが落ち、いよいよ本格的なシニア期を迎えたことが感じられます。感覚器の衰えが先か、運動器の衰えが先かは個体差がありますが、徐々に知力の衰え（認知症など）も表面化します。

## 若いうちからのケアが重要

お散歩やトレーニングを問題なく行える時期に、飼い主さんが愛犬の衰えを意識することはほとんどないと思います。しかし、「どんな子もシニア期を迎える」という意識を持って、若い時期にできることを考えておくことが大切です。成長期に、過度な運動や飼い主さんがコントロールのできない無理な運動（ドッグランで長時間自由に走らせたり、起伏の多い山道を散歩させたり、自転車やオートバイで散歩をするなど）を行うことで、足腰を痛めたりしないように注意しましょう。足腰を鍛えるのは、体の成長が終わり、体が完成した成犬になってからでも遅くはありません。成長期に足腰に障害が起これば、その影響は生涯続き、シニア期には歩行困難な状態になることもあります。



シニア期に見られる病気

### 離断性骨軟骨炎

……肩関節内ではがれた軟骨の骨片が関節内にあるため、歩くと痛みを生じます。若いうちから発症するともありますが、通常は加齢に伴い表面化します。痛みが薬で抑えられない場合、その骨片を手術で取りのぞくことで治療します。

### 変形性脊椎症

……背骨（脊椎）と背骨のあいだにある椎間板の不安定化に伴い、脊椎が変形する症状です。重度になると下半身が麻痺し、歩行やトイレが困難になります。治療にはMRI検査での確定診断が必要になります。

### 老齢性白内障

……目のピントを調節する水晶体（レンズ）が濁り、視力が低下していく病気です。早期であれば手術によって視力を取り戻すことができます。

### 水晶体脱臼

……老化や外傷によって、水晶体が眼球内で脱臼する病気です。網膜が健康であれば、ぼやけた状態でも見ることは可能です。しかしながら、眼球内に炎症が起きますので、緑内障（視神経が圧迫されて障害が起る病気）を発症し、完全に視力を失うこともあり、たまたま手術が必要となる場合があります。

## シニア期に心がけること

シニア期を迎えたワンコに考えてあげなくてはいけないことはさまざまありますが、大きなポイントは3つとなります。

### 新しい刺激を与えて脳の活性化を促す

脳に刺激を与えるために、ふだんの生活のなかに簡単なトレーニングを取り入れたり、カートを使って散歩時間を長くしたり、今までとは違う景色を見せてあげたりすると効果的です。また、若いときに比べて時間はかかりますが、おやつやごはんを使って、「オスワリ」、「フセ」、「オテ」、などの簡単なコマンドを出してあげるとさらに楽しい時間を過ごすことができます。アイコンタクトでキラキラとした目を見るたびに、もっと楽しませてあげたいと思うようになるでしょう。

### 足腰の筋力を維持する

若いころのように十分な運動ができなくなっても、ストレッチやマッサージを組み合わせ、できる限り体を動かすようにしましょう。多めに休憩を取りながら土や芝生の上を歩かせたり、舗装されていない緩やかな坂道を数回往復するだけでも、筋力の維持には効果的です。



腫瘍性疾患  
……シニア期に入ると、遺伝子のミスプログラムによって、毎日発生しているガン細胞の増殖を自身の免疫力で防ぐことができなくなり、乳腺や皮膚、内臓にも腫瘍ができます。定期的なドック検査を欠かさず、早期発見・早期治療を心がけましょう。

## 若いころに身に着けておきたいこと

- 排便や排尿を家の中や玄関などで行えるようにする
- どんなことをされても興奮しすぎないように、攻撃性をコントロールできるようにする
- 投薬や耳掃除、点眼処置、歯みがきなどのやり方を覚えておく
- 介護用ハーネスの装着を嫌がらないようにする
- 足腰を痛めた際に必要となるハンテージや保護材を食べたりしないように訓練する
- 成長期に無理な運動をさせないようにする

### 食事の適正化を図る

加齢に伴い栄養素の消化・吸収能力も低下します。そのため消化しやすい高たんぱく質・低脂肪の食事に切り替えていくことが大切です。シニア用フードに変更したら、欠かさず体重測定をして肥満ややせすぎに注意し、適正な食事量を設定します。体調次第で、1回の食事量を減らし、与える回数を増やすことも必要かもしれません。また、水を十分に飲んでいるかを確認することや、尿量を確認するのも健康管理に役立ちます。獣医師などに相談し、適切なサプリメントなどを処方してもらおうと、より快適なシニア期を過ごす助けになるでしょう。



### 歯周病

……歯みがきなどのケアを怠ると、シニア期には歯周病で悩むこととなります。現在では無麻酔で歯石除去を行っている病院もあります。ふだんから歯みがきを欠かさず、口腔衛生を保つようにしましょう。

### 甲状腺機能低下

……シエットランド・シープドッグに起こりやすいため、近縁のボーダー・コリにも比較的認められる内分泌疾患です。成長ホルモンの分泌が低下するため、被毛につやがなくなり脱毛しやすくなります。最終的にはさまざまな器管に障害が現れます。動物病院で処方される薬で症状を緩和することができます。

### 腫瘍性疾患

……シニア期に入ると、遺伝子のミスプログラムによって、毎日発生しているガン細胞の増殖を自身の免疫力で防ぐことができなくなり、乳腺や皮膚、内臓にも腫瘍ができます。定期的なドック検査を欠かさず、早期発見・早期治療を心がけましょう。